

大学生の学業成績と知能構造およびメンタル特性との関係に関する 実証研究—就業力育成のための教育システムの洗練に向けて—[†]

後藤 文彦*

京都産業大学経営学部*

この研究の目的は大学生の学業成績と彼らの知能構造およびメンタル特性との関係を明らかにするところにある。ところで、これまでの研究によって、効果的な教育システムをとれば、学生の知能構造やメンタル特性は強化されることが分かっている。したがって、この研究の成果を踏まえて、たとえば専門知識や知能構造、メンタル特性といった就業力の主たる要素を強化するための効果的な教育システムを開発することが可能になる。

学業成績は、学習能力と学習意欲とにかかっているということには疑問の余地はないであろう。本研究では、学業成績は GPA で測定される。そして、学習能力の測定には知能構造を測定する検査が用いられ、学習意欲の測定にはメンタル特性検査が用いられる。

101名の学生が分析対象にされ、次のような結果を得た。すなわち、高い知能構造を持った学生や高いレベルのメンタル特性を持った学生のGPAの方が優れている確立が高いことが明らかになった。

キーワード: 就業力, 大学教育, 大学生の学業成績, 知能構造, メンタル特性

1. はじめに

本研究の目的は、大学生の学業成績と知能構造およびメンタル特性との関係を実証的に明らかにし、もって、就業力¹⁾育成のための教育システム開発に資するところにある。

学生の学力不足が問題にされだしてから久しい。そして、学生の学力不足解消に多くの努力がなされ、FD活動も盛んになってきている。しかし、そのような努力は、学力不足解消に役立っているのだろうか。

かつて、学生が勉強しないことについて、怠け者説が横行していた時代があった。大学はそれに対処すべく、出席をとるなど厳しく強制しようとした。しかし、学生は、勉強するためにではなく、出席をとってもらうだけに大学に来ているようであった。こんな時、怠け者説にもとづいた学習観を批判し、知的好奇心に訴えることが提唱された²⁾。

しかし、今の学生は当時の学生とは明らかに違うのではないだろうか。生まれつき誰もが持っているはずの知的好奇心は心の奥底に閉じ込められてしまい、表に出てこれなくなってしまうかのように思われる。このような状況にある学生の知的好奇心に直接訴えようとしても、センサー自体が閉じられており、学生には伝わらないのではないだろうか。

このような時、伝統的な教育に固執して、さらにそれを強化しても、効果はあがらないどころか、かえって、マイナスの効果を生んでしまうことになることが危惧される。教育に関するパラダイム・シフトが必要なのではないだろうか。

以上のような状況を踏まえて、新たな視点から学業成績の問題をみてみたい。そのために、ここでは、文部科学省(2010)が提唱している就業力—社会的・職業的自立を図る力—を切り口にして、大学生の学業成績の問題をとりあげる。

2. 問題意識と先行研究

ここでは、本研究を始めるに当たって抱いていた問題意識を明らかにしたうえで、その問題意識と軸を同じくする研究を吟味してみる。そして、先行研究を吟味するなかで、本研究の方向を定めようと考えている。

まず、本研究を始めるに当たって、学業成績の向上に関して次の二つの問題を意識していた。

- (1) 学業成績を向上させる要素は何か
 - (2) 学業成績を向上させる要素の中に、文部科学省のいう就業力に関わるものはないだろうか
- もし、このような問題が明らかにされれば、就業力育成の

ための有効な教育システムを構築する足がかりを得ることができるのではないだろうか。

学力とそれを向上させる要因との関係に注目した研究には多くのものがみられる。そのような研究の一つに、小学生を対象にして、態度的要因と学力向上との間には関係があることを実証した水野(1944)の研究³⁾がある。その研究では、態度的要因として次のものが挙げられている。

- ① 達成力: 持続力、集中力
- ② 学習意欲: 競争心、成功感
- ③ 学習技術: 学習習慣、学習方法、時間管理、学習スピード
- ④ 親子関係: うれしい体験、いやな体験、愛情的関わり、教育的関わり
- ⑤ 自己イメージ: 自分への自信、勉強が好き、勉強ができる

親子関係が態度的要因の一つにあげられてはいるが、学力と直結していそうな要素があげられている。

それに対して、社会をつくり、それを運営し、望ましい方向へと社会を変える力を社会力⁴⁾としてとらえ、社会力と学力との関係を実証した研究がある。これも小学生を対象にした実証研究であり、次の20の質問項目で子供の社会力を測定⁵⁾して、学力との関係を分析している。この質問項目には、門脇(2005)の提唱している社会力の全容が、小学生にも理解できる言葉で具体的に示されている。

- ① クラスに新しく入ってきた子がいると、すぐになかよくなりたくなる。
- ② 知らない人に会うと、いろいろ質問したくなる。
- ③ どんな子ども、なかよくなりたくなる。
- ④ 近所のおとなの人も、よく話をする。
- ⑤ 知らないことがあると、知っている人におしえてもらいたくなる。
- ⑥ 一人でいるよりも、おおぜいの人といっしょにいるほうがすき。
- ⑦ ほかの人から話を聞くのがすき。
- ⑧ 友だちに、何でもよく話をする。
- ⑨ 自分で正しいと思ったことは、だれにもきちんと考えを言う。
- ⑩ 友だちだったら、その人のきもちがよくわかる。
- ⑪ こまっている人を見ると、たすけてあげたくなる。
- ⑫ 友だちがかなしそうにしていると、自分もかなしくなる。
- ⑬ テレビのニュースを見たり、新聞を読んだりするのがすき。
- ⑭ だれかに注意されたりすると、ありがとうと言いたくな

る。

- ⑮ 友だちの顔を見ると、どんなきもちがよくわかる。
- ⑯ 友だちとけんかしたあとは、自分からあやまったりして、なかなかおりする。
- ⑰ 友だちから、いろいろそうだんされたり、こまったことを話されたりする。
- ⑱ 知っている人がうれしそうにしていると、自分もうれしくなる。
- ⑲ いろいろなことにきょうみがあって、いろいろなことをやってみたくなる。
- ⑳ おとなの人におしえてもらいながら、いっしょに何かをするのがすき。

調査に当たっては、主要5科目について次の質問が追加されている⁶⁾。

- ① 好きか嫌いか
- ② 勉強することが楽しいかどうか
- ③ 学校の授業がわかるかどうか
- ④ 自分の成績がいいか悪い
- ⑤ 成績をもっとよくしたいと思っているかどうか
- ⑥ 家でどのくらい勉強しているか

調査結果を分析して、門脇(2005)は次のような結論を出している⁷⁾。

- ① 社会力のある子ほど勉強が好きで、楽しく勉強している。
- ② 社会力のある子ほど授業がよく理解でき、成績もよい。
- ③ 社会力のある子は向上心があり、勉強する時間も多い。

門脇(2005)の研究を吟味することによって、就業力に関して次のようなヒントを得ることができる。門脇(2005)の提唱している社会力は社会的に自立するのに必要な力と置き換えてもよい。そうだとすれば、社会力は就業力に強く関わっていると考えられる。そこで、大学生を対象にする本研究では、次のような方法で分析を進めることにする。

① 人の、自分や他者、集団に対する行動スタイルを社会力と置き換え、行動スタイルに関わるメンタル特性を測定する。そして、このようなメンタル特性が学習意欲を生む内的根源になっているととらえて、その測定値と学業成績との関係を分析する。

② 社会的・職業的自立を図るには、問題解決能力が必要不可欠な要素になっているとともに、それは、学習能力の重要な要素でもある。そこで、ここでは問題解決能力を測定して、それを学習能力とみなし、その測定値と学業成績との関係を分析する。

ここで、注意しておかなければならない大切なことがある。すなわち、一般に、メンタル特性や問題解決能力は先天的に与えられたもので、変化しないと考えられがちである。もしそうであり、しかもメンタル特性や問題解決能力が学業成績に関係しているとすれば、学業成績は先天的に決まってしまうことになる。しかし、そうではなく、メンタル特性や問題解決能力は、適切な教育システムのもとでは成長することが実証されている。また、伝統的な大学教育はメンタル特性や問題解決能力の育成には貢献しておらず、学生は、入学した時の状態のままですべて社会に出ていくことになることも実証されている⁸⁾。

3. データの基礎統計量と分析の方向性

分析に先立ち、分析に用いるデータを定義付けるとともに、データの統計的な特徴を記述し、分析の方向性を探るためにデータ間の関連性を確かめておこう。

3.1. 分析対象学生および人数

分析対象には下記の2010年度入学の1年次生を選んだ。

- ① 対象学生：「O/OCF-PBL 1」(秋学期)を受講している101名(男52名 女49名)
- ② 対象学生の所属学部
 - ・経済学部 18名(男10名 女8名)
 - ・経営学部 45名(男20名 25名)
 - ・法学部 21名(男16名 女5名)
 - ・外国語学部 8名(男2名 女6名)
 - ・文化学部 3名(男0名 女3名)
 - ・理学部 3名(男3名 女0名)
 - ・コンピュータ理工学部 3名(男1名 女2名)

3.2. 学業成績

データ取得時点では、2010年度春学期の成績しか確定されていない。そこで、学業成績としては2010年度春学期のGPAを用いた。学業成績の基礎統計量は表1の通りである。

表1. GPAの基本統計量

平均	2.53
標準誤差	0.07
中央値(メジアン)	2.65
最頻値(モード)	2.50
標準偏差	0.67
分散	0.45
尖度	0.38
歪度	-0.77

範囲	3.18
最小	0.45
最大	3.63
合計	255.48
標本数	101.00
最大値	3.63
最小値	0.45
信頼区間(95.0%)	[2.66, 2.40]

3.3. 知能構造

問題解決に関わる知能構造はCRATTI(適性科学研究センター)で測定した。CRATTIは知能構造を問題解決に当たっての「頭の働かせ方」という切り口でとらえている。そして、「頭の働かせ方」の特徴を次の2側面から測定し、測定値は偏差値で表され、50が成人としての平均値になっている。

① 収束的思考

正しい答えを求めようとする頭の働かせ方

② 発散的思考

いろいろな答えを求めようとする頭の働かせ方

収束的思考力と発散的思考力の基礎統計量は表2の通りであり、2010年度秋学期開始時(2010年9月)に検査が実施された。収束的思考力と発散的思考力ともに非常に高い平均値を示しているのが注目される。

表2. 知能構造の基本統計量

	収束的思考力	発散的思考力
平均	59.89	63.15
標準誤差	0.82	1.07
中央値(メジアン)	61.00	64.00
最頻値(モード)	61.00	55.00
標準偏差	8.28	10.77
分散	68.60	115.89
尖度	0.59	-0.66
歪度	0.51	0.10
範囲	44.00	44.00
最小	41.00	41.00
最大	85.00	85.00
合計	6049.00	6378.00
標本数	101.00	101.00
最大値	85.00	85.00
最小値	41.00	41.00
信頼区間(95.0%)	[61.53, 58.25]	[65.28, 61.02]

3.4. メンタル特性

他者や集団に対する行動スタイルを決定するメンタル特性の検査として、ここでは、適性科学研究センターの開発になるPC-TAOKを用いている。PC-TAOKは、人のメンタル特性を人との係わりでとらえ、次の三つの切り口で測定している。測定値は偏差値で示され、50が成人としての平均値になっている。

① 自分と自分との関係

自分と自分との関係が、自己信頼度と自己表現度との2軸でとらえられる。検査は、アイデンティティの発達度をこの2軸で測定し、自己実現の欲求の表われ方(自己表現スタイル)の特徴を示そうとしている。

② 自分と他者との関係

自分と他者との関係が、他者信頼度と他者援助度との2軸でとらえられる。検査は、コミュニケーション能力をこの2軸で測定し、コミュニケーションの欲求の表われ方(対他者交流スタイル)の特徴をみようとしている。

③ 自分と集団との関係

自分と集団との関係が職務遂行傾向度と対人親和度との2軸でとらえられる。検査は、ストレスに対処する能力としてのコーピング能力をこの2軸で測定し、モチベーションの欲求の表われ方(対集団行動スタイル)の特徴をみようとしている。

メンタル特性の基本統計量は表3の通りである。各項目の平均値は低く、現在の若者の一般的な姿を如実にあらわしている。

表3. メンタル特性の基本統計量

	自己実現の欲求の表われ方 (自己表現スタイル)		コミュニケーションの欲求の 表われ方(対他者交流スタイル)		モチベーションの欲求の表われ方 (対集団行動スタイル)	
	自信	自己表現	他者信頼	他者援助	職務遂行	対人親和
平均	42.38	42.42	43.66	48.67	37.31	49.41
標準誤差	1.84	1.62	1.80	1.69	1.62	0.95
中央値(メジアン)	41.00	41.00	46.00	48.00	35.00	50.00
最頻値(モード)	15.00	33.00	46.00	38.00	35.00	55.00
標準偏差	18.45	16.24	18.12	17.03	16.25	9.58
分散	340.56	263.61	328.17	290.00	264.11	91.78
尖度	-0.89	0.08	-1.00	-0.63	0.31	0.30
歪度	0.13	0.55	0.04	0.08	0.84	-0.39
範囲	67.00	70.00	66.00	70.00	68.00	51.00
最小	15.00	15.00	15.00	15.00	15.00	17.00
最大	82.00	85.00	81.00	85.00	83.00	68.00
合計	4280.00	4284.00	4410.00	4916.00	3768.00	4990.00
標本数	101.00	101.00	101.00	101.00	101.00	101.00
最大値	82.00	85.00	81.00	85.00	83.00	68.00
最小値	15.00	15.00	15.00	15.00	15.00	17.00
信頼区間(95.0%)	[46.02, 38.74]	[45.63, 39.21]	[47.24, 40.08]	[52.03, 45.31]	[40.52, 34.10]	[51.30, 47.52]

3.5. 相関分析

本研究で採用する分析方法の方向性を探るために、相関分析を用いてデータ間の関連性を確かめてみよう。

表4は興味深いことを物語っている。まず、GPAと相関を持った項目は皆無であり、本研究に、相関をベースにした分析を用いるのは困難であることを示している。しかし、その他の項目間には何らかの係わりが相互にみられる。たとえば、自信は最も多くの項目と相関を持っている。とくに、

職務遂行と対人親和とにはかなりの相関を持っており、自信は対集団行動スタイルにかなりかかわっていることが分かる。また、対集団行動スタイルには、自信のほか自己表現もかなりかかわっており、自分と自分との関係が対集団行動スタイルにかなりのかかわりを持っていることが考えられる。以上のように、この相関分析は本研究の分析方法に方向性を与えている。

表4. 相関係数および無相関の検定

相関係数	GPA	収束的 思考力	発散的 思考力	自信	自己 表現	他者 信頼	他者 援助	職務 遂行	対人 親和
GPA	1.0000	-	-	-	-	-	-	-	-
収束的 思考力	-	1.0000	0.2662	0.2421	-	-	-	-	-
発散的 思考力	-	0.2662	1.0000	0.2751	-	-	-	-	0.3058
自信	-	0.2421	0.2751	1.0000	0.4376	0.3670	-	0.5135	0.5825
自己 表現	-	-	-	0.4376	1.0000	-	-0.2856	0.7051	0.5304
他者 信頼	-	-	-	0.3670	-	1.0000	0.3746	-	0.3639
他者 援助	-	-	-	-	-0.2856	0.3746	1.0000	-0.3985	-
職務 遂行	-	-	-	0.5135	0.7051	-	-0.3985	1.0000	0.3466
対人 親和	-	-	0.3058	0.5825	0.5304	0.3639	-	0.3466	1.0000

無相関の検定

t検定 * : 5%有意 ** : 1%有意

	GPA	収束的 思考力	発散的 思考力	自信	自己 表現	他者 信頼	他者 援助	職務 遂行	対人 親和
GPA	-	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]
収束的 思考力	[]	-	[**]	[*]	[]	[]	[]	[]	[]
発散的 思考力	[]	[**]	-	[**]	[]	[]	[]	[]	[**]
自信	[]	[*]	[**]	-	[**]	[**]	[]	[**]	[**]
自己 表現	[]	[]	[]	[**]	-	[]	[**]	[**]	[**]
他者 信頼	[]	[]	[]	[**]	[]	-	[**]	[]	[**]
他者 援助	[]	[]	[]	[]	[**]	[**]	-	[**]	[]
職務 遂行	[]	[]	[]	[**]	[**]	[]	[**]	-	[**]
対人 親和	[]	[]	[**]	[**]	[**]	[**]	[]	[**]	-

4. 分析

4.1. 分析方法

すでに述べたように、学業成績と知能構造およびメンタル特性との関係を相関関係やそれをベースにした方法で分析するのは困難である。そこで、ここでは、分析に用いる知能構造やメンタル特性が成人の平均を50にした偏差値であらわされていることを利用して分析を進めることにしよう。

すなわち、まず、分析対象を次のように2分する。

- ①知能構造やメンタル特性が優れているグループ (Aグループ)
知能構造やメンタル特性の値 ≥ 55 (平均の50より0.5 σ 高い値)
- ②知能構造やメンタル特性が普通以下のグループ (Bグループ)

知能構造やメンタル特性の値<55

つぎに、 $GPA \geq 3.0$ を学業成績優秀者、逆に、 $GPA < 2.0$ を学業成績不良者とみて、A・Bグループ内での学業成績優秀者および学業成績不良者の出現率を比較する。この比較を通して、学業成績と知能構造およびメンタル特性との関係をみてみよう。

4.2. 学業成績と知能構造

知能構造の値によって分類されたA・B両グループの学業成績優秀者および学業成績不良者の出現率は表5の通

りである。

表5は次のようなことを意味している。まず、注目すべきは、分析対象者全体の58.4%が優れた知能構造を持っているということである⁹⁾。Aグループの成績優秀者の出現率は28.8%で、Bグループのそれは23.8%であり、Aグループの方が5%高くなっている。逆に、成績不良者の出現率をみれば、Bグループの方が8.5%高くなっている。すなわち、成績優秀者の出現率はAグループの方が高く、成績不良者のそれはBグループの方が高くなっている。

表5 学業成績と知能構造

		総数		成績優秀者($GPA \geq 3.0$)		成績不良者($GPA < 2.0$)	
		グループ別 (a)	a/b (%)	人数(c)	c/a (%)	人数(d)	d/a (%)
Aグループ	収束的思考力 ≥ 55 & 発散的思考力 ≥ 55	59	58.4	17	28.8	9	15.3
Bグループ	収束的思考力 < 55 & 発散的思考力 < 55	42	41.6	10	23.8	10	23.8
	合計	101(b)	100.0	27	26.7	19	18.8

4.3. 学業成績とメンタル特性

すでに述べたように、6要素(自信・自己表現・他者信頼・他者援助・職務遂行・対人親和)に細分されたメンタル特性は3要素(自己表現スタイル・対他者交流スタイル・対集団行動スタイル)にまとめられている。そこで、ここでも、3要素にまとめられたかたちで分析してみよう。

① 自己表現スタイル

自信および自己表現の値によって分類されたA・Bグループの学業成績優秀者および学業成績不良者の出現率は表6の通りである。

まず指摘しなければならないことは、Aグループに属している学生が僅か8.9%にすぎないということである。Aグループの成績優秀者の出現率は33.3%で、Bグループのそれ

表6 学業成績とメンタル特性 ① 自己表現スタイル

		総数		成績優秀者($GPA \geq 3.0$)		成績不良者($GPA < 2.0$)	
		グループ別 (a)	a/b (%)	人数(c)	c/a (%)	人数(d)	d/a (%)
Aグループ	自信 ≥ 55 & 自己表現 ≥ 55	9	8.9	3	33.3	2	22.2
Bグループ	自信 < 55 & 自己表現 < 55	92	91.1	24	26.1	17	18.5
	合計	101(b)	100.0	27	26.7	19	18.8

は26.1%であり、Aグループの方が7.2%高くなっている。また、成績不良者の出現率をみれば、Bグループの方が3.7%低くなっている。すなわち、成績優秀者の出現率はAグループの方が高く、成績不良者のそれもAグループの方が高くなっている。

② 对他者交流スタイル

他者信頼および他者援助の値によって分類されたA・B両グループの学業成績優秀者および学業成績不良者の出現率は表7の通りである。

Aグループの成績優秀者の出現率は38.9%で、Bグループのそれは24.1%であり、Aグループの方が14.8%高くなっている。また、成績不良者の出現率をみれば、Bグループの方が16.1%高くなっている。すなわち、成績優秀者の出現率はAグループの方が高く、成績不良者のそれはBグループの方が高くなっている。これらの差は自己表現スタイルの場合に比べて大きく、両グループの違いが明確になっている。

表7 学業成績とメンタル特性 ② 对他者交流スタイル

		総数		成績優秀者(GPA>=3.0)		成績不良者(GPA<2.0)	
		グループ別 (a)	a/b (%)	人数(c)	c/a (%)	人数(d)	d/a (%)
Aグループ	他者信頼>=55 & 他者援助>=55	18	17.8	7	38.9	1	5.6
Bグループ	他者信頼<55 & 他者援助<55	83	82.2	20	24.1	18	21.7
合計		101(b)	100.0	27	26.7	19	18.8

③ 対集団行動スタイル

職務遂行および対人親和の値によって分類されたA・B両グループの学業成績優秀者および学業成績不良者の出現率は表8の通りである。

Aグループの成績優秀者の出現率は33.3%で、Bグループ

のそれは26.1%であり、Aグループの方が7.2%高くなっている。また、成績不良者の出現率をみれば、Bグループの方が3.7%低くなっている。すなわち、成績優秀者の出現率はAグループの方が高く、成績不良者のそれもAグループの方が高くなっている。

表8 学業成績とメンタル特性 ③ 対集団行動スタイル

		総数		成績優秀者(GPA>=3.0)		成績不良者(GPA<2.0)	
		グループ別 (a)	a/b (%)	人数(c)	c/a (%)	人数(d)	d/a (%)
Aグループ	職務遂行>=55 & 対人親和>=55	9	8.9	3	33.3	2	22.2
Bグループ	職務遂行<55 & 対人親和<55	92	91.1	24	26.1	17	18.5
合計		101(b)	100.0	27	26.7	19	18.8

4.4. 学業成績・知能構造・メンタル特性のクロス分析

さいごに、全項目にわたって次のようにグループ化して分析してみよう。

- ①知能構造およびメンタル特性のすべての項目が55以上のグループ (α グループ)
- ②知能構造およびメンタル特性のすべての項目が55未満のグループ (β グループ)

しかし、グループ化した結果、サンプル数があまりにも少なすぎて分析に耐える状況ではなかった。すなわち、 α グループに属しているのは僅か1名で、 $GPA > 3$ であった。また、 β グループに属しているものは3名で、内1名は $GPA < 2$ で、 $GPA \geq 3$ の学生はいなかった。

5. おわりに

以上、学業成績は知能構造やメンタル特性に関わっていることが実証された。就業力とは何かを明らかにすることは非常に困難である。しかし、知能構造やメンタル特性は、社会的・職業的に自立するためには、欠かすことのできない要素であることには異論はないであろう。

ここで注意すべきは、知能構造やメンタル特性は適切な教育システムのもとでは成長することが実証されていることである。しかし、伝統的な大学教育システムは知能構造やメンタル特性の成長には貢献していないことも実証されている。

すでにみたように、分析の対象になった学生の知能構造には秀でたものがみられる。しかし、今の若者が一般的にそうであるように、分析の対象になった学生のメンタル特性は低く、自分の力を社会で役立てるエネルギーが乏しい状況にある。しかも、伝統的な大学教育システムが知能構造やメンタル特性の成長には無力だとすれば、彼らは、持っている優れた思考力を社会で発揮せずに終わってしまう可能性が高いことになる。

適切な教育システムのもとでは、彼らは激変する可能性を秘めている。学生のメンタル特性を成長させるための教育システムはすでに動き始めている。今後は、この教育システムの質を高めるとともに、さらに多くの学生を受け入れる体制をつくり上げる必要がある。

謝辞

本論文を仕上げるにあたって有意義な指摘を下された査読者に深く感謝いたします。

注

- 1) 文部科学省は、「社会的・職業的自立を図る」力のことを就業力といっている(文部科学省(2010)『平成22年度 大学生の就業力育成支援事業公募要領』, p.1.)。
- 2) 波多野誼余夫(2009)『知的な好奇心』, 中央公論新社。
- 3) 水野正憲(1944)“態度能力の変化と学力試験成績変化との関連”, 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, 日本教育心理学会, p.373.
- 4) 門脇厚司(2008)『子どもの社会力』, 岩波書店, pp.61-64.
- 5) 門脇厚司(2005)『社会力がよくわかる本』, 学事出版, p.232.
- 6) 同上, p.224.
- 7) 同上, pp.225-228.
- 8) a. 後藤文彦ら(2009)“「社会人基礎力」育成教育がメンタル・タフネスに与える効果の実証分析”, 京都マネジメント・レビュー, 16, 京都産業大学マネジメント研究会, pp.1-11. b. 後藤文彦・林誠次(2010)“学生が蘇る—社会をつくり上げるのに必要な内面のタフさを育成・強化する実証的試み—”, 大学と学生, 77, 独立行政法人日本学生支援機構, pp.35-40.
- 9) この傾向は、分析対象になった2010年度入学生のみならず、過去数年にわたる入学者も同様の傾向を持っている。しかし、本学の入学者にこのような傾向がみられる原因は不明である。優秀な能力を秘めて入学してきた学生が多いこの状況を放置すべきではなく、原因追求は喫緊の課題であろう。さらに、知能構造は、適切な教育システムのもとでは向上することを考えれば、なおさらである。

参考文献

- 後藤文彦ら(2009)“「社会人基礎力」育成教育がメンタル・タフネスに与える効果の実証分析”, 京都マネジメント・レビュー, 16, 京都産業大学マネジメント研究会, pp.1-11.
- 後藤文彦・林誠次(2010)“学生が蘇る—社会をつくり上げるのに必要な内面のタフさを育成・強化する実証的試み—”, 大学と学生, 77, 独立行政法人日本学生支援機構, pp.35-40.
- 波多野誼余夫・稲垣佳世子(2009)『知的な好奇心』, 中央公論新社。
- 池田啓実(2010)“CBI事前学習の「場」の機能の意義”, 高知大学教育研究論集, 14, pp.17-34.
- 門脇厚司(2003)『親と子の社会力』, 朝日新聞社。
- 門脇厚司(2005)『社会力がよくわかる本』, 学事出版。
- 門脇厚司(2006a)『社会力再興—つながる力で教育再建—』, 学事出版。
- 門脇厚司(2006b)『学校の社会力コーチカラのある子どもの育て方』

研究論文

—』, 朝日新聞社.

門脇厚司(2008)『子どもの社会力』, 岩波書店, pp.61-64.

門脇厚司・佐高信(2004)『〈大人〉の条件』, 岩波書店.

門脇厚司・田島信元(2007)『大人になったピーター・ベン—言語力と社会力—』, アートデイズ.

水野正憲(1944)“態度能力の変化と学力試験成績変化との関連”, 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, 日本教育心理学会, p.373.

文部科学省(2010)『平成22年度 大学生の就業力育成支援事業 公募要領』

上田紀行(2011)『生きる意味』, 岩波書店.

SUMMARY

The purpose of this paper is to examine the relationship between scholastic achievements of university students and their structures of intellectual faculties and mental traits. Our studies have shown that an effective education system can strengthen intellectual faculties and mental traits of university students. Therefore, this study will be contributable in developing an effective education system for fostering in students the elements necessary for employment, such as technical knowledge, intellectual faculties and mental traits.

There are no questions that scholastic achievements depend on the ability to study and the will to study. In this paper, scholastic achievements are measured by a GPA. The student's ability to study is measured by a test of the structures of intellectual faculties and the student's will to study is measured by a test of mental traits.

One hundred and one students were analyzed. It was found through this analysis that the probability of getting a high level GPA is strong for the students with high level intellectual faculties or mental traits.

KEYWORDS: Employability, University Education, Scholastic Achievements of University Students, Structures of Intellectual Faculties, and Mental Traits

2011年2月28日受理

†Fumihiko GOTO*: A Positive Study of the Relationship between Scholastic Achievements of University Students and their Structures of Intellectual Faculties and Mental Traits — To Improve the Education System for Employability—

* Faculty of Business Administration, Kyoto Sangyo University, Kamigamo Motoyama, Kitaku, Kyoto city, Kyoto, 603-8555 Japan